歌舞伎の舞台に描かれている背景画が普段の暮らしの中に入り込む。そんな取り組み「CHIKIRI PROJECT（ちきりプロジェクト）」が旗揚げされた。身近で楽しめるアートになったり、商業施設の壁面を飾ったり。和だけどモダン、どこか見たことがあるようで新鮮と不思議な魅力が広がっている。

歌舞伎の背景画を暮らしへ

CHIKIRI PROJECT

和モダン新鮮、ライブペイントも

リビングの壁に掛かる長方形や正方形の絵。絵柄には現実離れしたデフォルメ感がある。アクリル絵の具を使っているので日本画とは違う。どこか懐かしさを誘うが、新奇性にも富んでいる。これらは、ちきりプロジェクトが2022年に発売した「テアトルバック」というプロダクトだ。

元は歌舞伎の舞台で使われた背景画だ。高さ15尺（4・54メートル）、幅60尺（18・18メートル）に及ぶ背景画の一部分を、高さ71・2センチメートル、幅33・3センチと、高さと幅がそれぞれ33・3センチの原寸大サイズで切り取った。その部分だけを職人が布に新たに描き下ろし、ベニヤ板に張ってオリジナルフレームで額装している。

今年1月に新たに発表した「アートだるま」は高さ25センチ、45センチ、75センチの3サイズをそろえた。目にはくま取りを施し、平面だった背景画のモチーフを立体的に展開している。まるで斬新なグラフィックデザインのようで、一目で圧倒される存在感がある。

「なじみのなかった背景画から今まで見たこともないアートを生み出せた」とプロジェクト代表の右近和磨さん。オンラインや百貨店のポップアップで販売しており、30～60代のアート好きの男女が購入しているという。

同プロジェクトは右近さんが所属するPRイベント運営のジーディーインク（東京・渋谷）と、舞台製作の金井大道具（同・中央）の共同事業だ。右近さんらはイベントの美術施工で金井大道具と仕事し、卓越した技術で職人が仕上げる背景画の存在を知った。「歌舞伎の舞台を飛び出したらどうなるだろう」という期待感が膨らんだ。

金井大道具は今年で創業140年。大規模イベントの舞台設営やテレビのセット製作を手掛けているが、創業から続くのが歌舞伎や能、文楽といった伝統芸能の舞台美術だ。舞台作りは歴史的な形式にのっとりながら、それを支える技術や知識に関してはほぼマニュアルがないという。

背景画は独特な筆さばきや調色が求められ、どれも口伝えで受け継がれてきた。いわば若い世代は上の世代の仕事ぶりを見て学ぶ。同社で長年現場を束ねてきた高柳和士執行役員は「一人前になるのに7～10年かかる」と話す。浮世絵や大和絵をルーツとする背景画は、他の絵画とは違う平面的で独自の様式がある。例えば、「松羽目」という舞台で描かれる松は写実的ではなく、どう見ても自然界には存在しない。でも見る人は誰しも松だと思う。雑木はシュークリームのようにモクモクとさせ、明るい緑色を付けたはけを画面にトントンとたたいて葉っぱを表す。

線と面の構成は一見シンプルだが、形や色彩は歌舞伎のある種のくどさや外連味（けれんみ）を表現する。舞台を引き立てようと長い年月をかけて考えられたスタイルなのだろう。しかも、色や形は固定しているわけではなく、舞台を務める役者の意向によってその都度変わる。公演が終われば、再び背景画として使われることはないはかなさもある。

「そうした素晴らしさは歌舞伎を見に来た人たちしか知らない世界」。自分たちの技術には高い価値がある。高柳さんは描き手にそんな体験ができる場を新たに設けたいとかねて考えていた。

両者の思いがつながり、門外不出だった背景画を活用したプロジェクトが22年に立ち上がった。ちなみに「ちきり」とは木と木とのつなぎ目を指す大工用語。企業と文化、人と職人など色々なものをつなげていく意味合いを込めた。

プロジェクトを発表すると、様々な企業から仕事の依頼が舞い込んだ。23年に東京・池袋のゲームセンター「GiGO（ギーゴ）総本店」の空間デザインを担当した。24年には静岡県藤枝市の丸七製茶本店で、歌舞伎舞踊の演目「藤娘」をベースにしたオリジナルアートを製作。25年秋には高島屋大阪店（大阪市）のイベントビジュアルを、歌舞伎演目「紅葉狩」の背景画をベースに作り上げた。

また、松屋銀座店（東京・中央）の正面玄関では、銀座のメインストリートを行き交う人たちの前でライブペインティングを実施した。ひのき舞台作りの裏方が、まさに舞台に躍り出る活躍をみせた。

「非日常が日常に。これまで古典芸能に興味がなかった人たちに、舞台背景画の純粋な美しさや魅力を感じてもらっている」と右近さんは手応えを語る。海外からの問い合わせもあることから、今後は日本の背景画文化の世界進出も視野に入れる。

ただ、背景画の製作はそもそも閉鎖的な世界。露出が増えることで応援する声がある半面、それを良しとしない声も高まりやすい。大胆かつ慎重な推し進め方が必要となるだろう。

（ライター　佐藤俊郎）